

19才

彼女はソファに身を横たえながら言った
肉付きのよい太ももをあらわにしながら
「低俗よ」と

部屋には汗の匂いが満ち満ち
僕は吐き気をもよおしていた
嘗みというものに

彼女の微笑には侮蔑が含まれていた
この僕の指先で干からびた陶酔を
彼女はその微笑によって刺青とした

外に飛び出して夜気を何度吸い込んでも
内臓が口から飛び出しそうな気がして
冷や汗が次々に噴出して頬を流れていった

既に生を絶つことも不可能だった
全ては遅すぎたのだ
ああ、どうして今更、生の所有権を主張できよう

僕には笑うことだけが許された
それにさえ条件が付されていた
「大声で」という・・・

(1992.1.19)